

料や敷き材にするため、スキなどの草を束ね錐状に立てかけたものを使う。秋のこの風景は「とちぎのふるさと田園風景百選」のひとつにも選ばれた。自然の恵みを上手に取り入れてきた人々の暮らしが今でも生きている。

かつて、このような草原は全国各地でごく普通に見られた。今でも阿蘇(熊本)、秋吉台(山口)、霧ヶ峰(長野)などは広大な草原が有

この草原からもたらされる恵みは、山菜の採取はもとより、茅葺き屋根の材料や家の断熱材、また牛馬の飼料、畑の肥料など、人々の生活に欠かせないものであつた。草原や薪炭林、畑・水田などを一体的に利用しながら自然の恵みを絶やすことなく長い年月を持続してきた生活があつた。これらの草原は自然に残されてきたものではない。

りの時期には朝2時に起きて離れた茅場まで歩いて行き、50束もの草を背中に積んで家に戻つて朝食の支度をしたもんだよ」と話す。十島部の草原も人々のこのような日々の努力によつて長い年月守られてきた。

しかし、明治初期、国士の13%以上もの広大な面積を占めていた草原が、現在

土呂部の力が太  
後世に

いいむら  
たかぶみ



日光市栗山地域の土呂部に6分におよぶ美しい草原が広がる。この草原は、春はミズバショウやスミレ類、夏から秋にかけてはオニナエシ・カワラナデシコ・ワレモコウなどの美しい花々で彩られる。今ではほ

名だが、小規模な草原は人里近くには必ずといつていほど存在した。人々はこの草原を「茅場」や「草刈り場」、土呂部では「カツバ」と親しみを込めて呼び、数百年以上にわたり大切に守ってきた。

雨の多い日本は、ほとんど  
の土地は放置しておくとや  
がて森に変わっていく。草  
原を維持するためには草刈  
り、火入れ、放牧など、人  
の手による日常の管理や利  
用が欠かせない。土呂部で  
牛を飼い茅場の草刈りを続

では1%までに減少したと言われる。土呂部の草原も40年前には20分以上利用されていたが現在は1分弱となつた。昭和30年代以降、全国の草原利用は急激に減少した。茅葺き屋根はトタ屋根に、馬は耕運機や自

徐々に人々の生活から遠い存在になり、植林したり放置され森に戻つていった。土呂部の草原は、人の手によつて長期間維持されたきた草原の中では県内で最大の面積を持つ。だが、この美しい草原も時代の流れ

動車に、堆肥は化学肥料に代わった。さらに若者は都会に出て、山村の集落は高齢化が進行し働き手を失つていつた。こうして草原はだきながら、草刈りや茅干チチづくりなど、できる限りから活動を始める人々となつた。

日光茅ボッチの会代表。1980年に旧日光市職員となり、企画課係長などを経て現日光市生涯学習課長、総合政策課長を務め、2013年3月に早期退職。同年11月には、同市土呂部の里山風景と草原植物を守るため、日光茅ボッチの会を設立した。日光野鳥研究会事務局長。宇都宮大卒。日光市在住、58歳。

才

私が生まれ育った宇都宮市の住宅街は、雑木林が広がる「八幡山」や「水道山」にも近い環境だった。50年前は近くに水田が広がり小川が流れ、魚やカエル、さらには洞窟ではコウモリを捕まえた。化石も見つけた。野外で遊ぶことしか知らなかつた当時の子どもたちには、樂園のような環境だった。セミやチョウを捕まえた。母が手ぬぐいで手作りし、竹竿に取り付けて使っていた。そんな道具でやつと捕まえたキアゲハの羽の複雑な美しさの模様に魅了された。頭に冠のあるミヤマクワガタを捕まえた時は鼻高々と反響に自慢した。

ある日、上級生の男の子が絹でできた大きな捕虫網と「三角函」という採集ケースを腰につけ、華麗にチョウを収納する立派な立派な道具にだ。その姿に一目ぼれだつた。男の子にではなく、その立派な道具にだ。その上級生にもらったお古のチョウ類図鑑を見るのが

寝る前の楽しみで、解説文を読みながら美しいチョウが飛ぶ山の情景を想像して眠りについていた。

こんな幼少時代を過ぎて、チョウの世界に傾倒していくようになる。高校受験を控えた中学3年の時

は、原や那須、日光、尾瀬や南アルプス、八ヶ岳など、どこでも行つた。泊まりはいつも駅やバス停の待合室だった。

こうして間近な日光の自然に強く惹かれるようになつた。これに伴い、やぶで

キアゲハの美貌に感動しているから半世紀。私の原点でもあつた宇都宮市の水田や雑木林は宅地や店から姿を消したチョウに2度と出会うことはできない。

かつてのようない密度の濃い自然是、雪の多い地域や電気柵の中にのみ残される時代になった。時代と共に便利で快適になる生活、それを享受することは、失うものも多いということだろう。このサイクルのどこかを変え、子孫の未来につなげる努力を続けることは、私たちの責務だと感じている。

や雑木林にかつての「里山」の面影はない。豊かだった日光の自然もシカの食害などによって大きく様変わりし、シカが食べない植物が繁茂する単調な植生に変わつた。これに伴い、やぶで繁殖するウグイスの声を聞く機会も少なくなり、日光から姿を消したチョウに2度と出会うことはできない。

「こゝは絶対に虫捕りに行きません」と担任に誓つておきながら、こつそりと捕虫網を持って山に行つたことを思い出す。春になり虫が動きだすと血が騒いでしまうのである。昆虫を見るためには植物も知りたいと、教師だった父の同僚にいろいろと教えてもらつて、いろいろと植物の魅力に惹きつけられていった。自然の中で時間を過ごすことが心地よく、いつかは

## 消えゆく魚と虫の「里山」

飯村 孝文



舗に変わり、子どもたちが虫捕りや魚釣りに興じる姿はもうない。残つているとこでも休耕田が目立ち、人の手が入らなくなつた畠がある。白根山弥陀ヶ池のほとり一面に咲くシラネアオイ、小田代ヶ原のノアザミに群れるヒョウモンチョウ、森の口だまりで群れ飛ぶ金緑色に光るアイノミドリシジミ。目の前の自然の濃さに夢中だった。大学では林学を学び、どんどん木の魅力に引き込まれていった。美しい森が多い日光の自然の中で時間を過ごすことが心地よく、いつかは

日光茅ボッチの会代表。

1980年に旧日光市職員となり、企画課係長などを経て現日光市生涯学習課長、総合政策課長を務め、2013年3月に早期退職。同年11月には、同市土呂部の里山風景と草原植物を守るため、日光茅ボッチの会を設立した。日

光野鳥研究会事務局長。宇都宮大卒。日光市在住、58歳。



## しもつけ隨想

東京都渋谷区にある明治神宮は、明治天皇と皇后を御祭神とする神宮として大正時代に造営された。わずかに畠があるだけの70余年の荒れ地に造営することが決まり、境内をどのような杜にするかを当時第一線で活躍していた林学、造園、農学の専門家たちが集められ設計したという。

そうして考えられた設計思想には驚く。それは、境内林の手入れをせずに安定した状態でずっと維持できる永遠の森を100年後に完成させるという壮大なものだった。境内の植林が始まつた大正初期からほぼ100年後になる昨年、明治神宮の杜を歩く機会を得た。そこは、都会の喧騒から想像もできない別世界だつた。東京に本来生育する小山や沢、池、平坦地など、それぞれの環境に合わせて植えられ、大きく成長し、多様な植物で構成される調

和のとれた美しい照葉樹の森となつた。

そして木々の間には次世代の森を担う苗木が自然に芽生え成長し、野鳥などたくさんの小動物も見かけることができる。鬱蒼と茂る樹木に覆われた杜は神々し

「滝尾の杜」と呼ばれ、樹齢千年近くになる直径1mを超えるスギの巨木の森だ。本県には本来、スギは自生しておらず創建当時に人の手によって植えられたものであろう。長い年月を経て今ではスギとともにト

「茅ボッチ」が秋の里山の風景を創り出す。

いずれの例も、自然が持つ長い時間の物差しに人間では見られなくなつた明るい環境を好む草花が美しくて都合の良い形に変えてきた。自然はその用意された代の森を担う苗木が自然に芽生え成長し、野鳥などたくさんの小動物も見かけることができる。鬱蒼と茂る樹木に覆われた杜は神々し

「滝尾の杜」と呼ばれ、樹齢千年近くになる直径1mを超えるスギの巨木の森だ。本県には本来、スギは自生しておらず創建当時に人の手によって植えられたものであろう。長い年月を経て今ではスギとともにト

## 長い自然の物差し

いいむら  
飯村 孝文



く、これが大都会に人工的に造られた森であるとは信じがたい。

チノキやブナ、カエデ類などの多様な植物が育つ美しい森になつた。

が合わせて思惑を実現してきたものだ。自然是人間のわがままをある程度まで許

生きていく、という姿勢を容してくれる範囲で人間が忘れず日々の生活を過ごせたらと思う。

1月28日付の本欄で栗山日光東照宮の北に位置す地域の土呂部の草原について紹介させていただいた。

日光茅ボッチの会代表。1980年に旧日光市職員となり、企画課係長などを経て現日光市生涯学習課長、総合政策課長を務め、2013年3月に早期退職。同年11月には、同市土呂部の里山風景と草原植物を守るため、日光茅ボッチの会を設立した。日光野鳥研究会事務局長。宇都宮大卒。日光市在住、58歳。

く、これが大都会に人工的に造られた森であるとは信じがたい。

チノキやブナ、カエデ類などの多様な植物が育つ美しい森になつた。

が合わせて思惑を実現してきたものだ。自然是人間のわがままをある程度まで許

生きていく、という姿勢を容してくれる範囲で人間が忘れず日々の生活を過ごせたらと思う。

栗山日光東照宮の北に位置する日光滝尾神社は、日光開山後間もない820年に創建されたと伝えられる。その長い歴史の重みと木々が醸し出す神々しさから近年刈りや火入れなどの方法で人手によって維持されてきた草原だ。今では、ほか

オヒ

♪夏がくれば思い出す  
♪で有名な尾瀬のミズバシ  
ヨウ。小学生の頃、ミズバシ  
ショウが無数に咲く尾瀬を  
紹介する一枚の風景写真を  
図鑑で見て、尾瀬は天国の  
ように美しいところだと強  
い印象と憧れを持つてい  
た。そしていつか、尾瀬に自  
生するミズバショウを見  
たいと思っていた。

中学生になつたら月下旬

旬、福島県檜枝岐村までバ  
スで行き、そこから工事現  
場に向かうダンプカーに乗  
せてもらい、憧れの尾瀬に  
初めて行くことができた。

そこは、オオシラビソなど  
の濃緑色の針葉樹の森に囲  
まれた湿原だった。まだ雪  
がたくさん残っていたが温  
原の3分の1くらいは雪が  
溶けて枯れ草色に変わり、  
そこを流れる小川沿いに咲  
き始めたミズバショウの真  
っ白な花が一面に咲く、ま  
さに夢のように美しいとこ  
ろだった。

ミズバショウだけでなく  
森や湿原や川、それぞれが  
役割を持ち、それが当たり  
前のように調和している様  
は美しく、子ども心にも感  
動した記憶がある。帰路は  
長い歩きだつたが、初めて  
見た尾瀬の感動の余韻に浸  
りながら、ちょうど満開だ  
ったムラサキヤシオツツジ

の花を見ることができ  
保全してきたため、今でも  
見た尾瀬の感動の余韻に浸  
りながら、ちょうど満開だ  
ったムラサキヤシオツツジ

の花を見ることができ  
しまった。幸い土呂部地区  
のミズバショウ自生地は、  
旧栗山村がフェンスを囲い  
は森林より草原の方が雨水  
を蓄える能力が高いことが  
分かつてきた。樹木から蒸  
散する水分が多いからだ。  
秋の風景と、咲き競う草原

性の草花を守るために活動  
を進めている。この活動を  
継続することが土呂部の希  
少な草原環境を後世に残す  
ことにつながつていけばと  
思う。

散歩途中の地元のお年寄  
りが「新聞見たよ。カッパ  
をきれいにしてくれてあり  
がとう」と声をかけてくれ  
る。とてもうれしい。この  
随想が掲載される頃、土呂  
部のカッパはニッコウキス  
ゲが咲き、草原に棲むヒメ  
シジミが無数に舞う、生き  
物が躍動する季節を迎えて  
いることだろう。



飯村 孝文



散歩途中の地元のお年寄

りが「新聞見たよ。カッパ  
をきれいにしてくれてあり  
がとう」と声をかけてくれ  
る。とてもうれしい。この  
隨想が掲載される頃、土呂  
部のカッパはニッコウキス  
ゲが咲き、草原に棲むヒメ  
シジミが無数に舞う、生き  
物が躍動する季節を迎えて  
いることだろう。

やオオカメノキの花を見な  
がらだったので苦にならな  
かった。

ミズバショウは本州中部  
地方以北の日本海側では、  
く普通に見かける植物だ  
が、関東地方の自生地は少  
ない。県内では日光市の土  
呂部と野門地区、那須塩原  
市の大沼湖畔などに自生地  
があるが、土呂部地区以外  
はシカの食害などにより、  
ほとんど見られなくなつて  
いる。

ミズバショウが咲く尾瀬  
の湿原が周辺の針葉樹の森  
によって守られてきたのと  
同じように、土呂部のミズ  
バショウ自生地の湿原も取  
り囲む周辺の環境が守つて  
きた。その環境は数百年に  
わたって草刈りや火入れな  
ど の方法で地元の人々の努  
力によつて維持されてきた

日光茅ボッチの会代表。1980年に旧日光市生涯学習  
課長、総合政策課長を務め、2013年3月に早期  
退職。同年11月には、同市土呂部の里山風景と草原  
植物を守るため、日光茅ボッチの会を設立した。日  
光野鳥研究会事務局長。宇都宮大卒。日光市在住、  
58歳。

しもつけ隨想